

論 説

天保『ごくせん』伝異聞

福岡の熱血「女先生」——亀井少榊

松原 唐嶋
Touku MATSUBARA

(凡例) 人物の年齢は原則として数え年とする。本稿のヒロイン、亀井少榊は2月生まれなので、1歳を減ずれば、ほぼ満年齢になる。また年月日は年号と旧暦によるが、必要に応じて(1800.1.1)のように西暦と新暦を補った。また地名についても「西新町(福岡市早良区)」のように、現行の地名を()内に補った。

■ 1 亀井少榊とその家族について

表題の『ごくせん』は、人気女優をヒロインに起用し、3回もシリーズ化されるほど人気を博したテレビドラマであり、その都度、映画化もされているので、ご存知の人も多かろう。任侠の家に育てられた男勝りのヒロインが、教師として、所謂「やんちゃ」な男子生徒たちを相手に体当たりの熱血教育を繰り広げる、という物語である。

そこでまず「ごくせん」顔負けの女教師、亀井少榊について紹介したい。彼女は寛政10年2月19日(1798.4.5)、福岡の姪浜(福岡市西区)で生まれ、安政5年7月6日(1858.8.4)、今宿(同西区)で亡くなった。本名は「友之」、通称は友。雅号には少榊の他、窈窕邱がある。本稿では最も知られた「少榊」で統一する。

父は亀井昭陽、祖父は亀井南冥で、ともに福岡を代表する漢学者である。任侠ではないが、^(注1) 俠気はあった。南冥には、『儒侠・亀井南冥』という伝記があるほか、日本史が得意な生徒なら、^(注2) 「漢委奴國王」印を『後漢書』東夷伝のものと同定したと知っているかも知れない。所謂^(注3) 金印である。この金印が改鑄を免れて今日に伝わっているのは、百両の大金さえ惜しまなかった南冥の^(注4) 俠気に因る所が大きい。福沢諭吉の漢学の師、白石照山が亀井一門の熱狂的な信奉者だったこと、また森鷗外の小説『北条霞亭』に、南冥と昭陽が登場することからも、亀井父子の評判の高さは推察できよう。少榊はその優秀な血を受け継ぎ、幼い時から極めて利発で、漢詩文、書画にその才能を発揮した。のみならず、後述するように人間的にたいへん魅力のある「姐御」でもあった。

才女、少榊の例で明らかのように、亀井門下では、女子にも高度な漢学を教えることに極

めて肯定的であり、かつ積極的だった。これは時代に先駆けた南冥の慧眼(注5)による所が大きい。南冥は、天明8年(1788)の時点で、人の母となるすべての女子にとって、漢学が不可欠だと認識していた。これは単に知識の習得だけではなく、難度の高い漢籍を学ぶことによる人格陶冶(注6)を期待してのことであった。そのため南冥は、中国史上最高の才女、班昭(注6)が著した『女誡』を、すべての女子に、しかも原文の漢文で学ばせようと意図していたのである。この女子高等教育は、少栞(注7)の母の世代から開始されていた。少栞の母、伊智(注7)(安永6(1777)生)は夫となる昭陽から、漢文で書かれた「内訓(妻としての心得)」を与えられ、また子どもに『詩経』を教えるだけの素養があった。叔母の紋(注7)(安永8(1779)生)になると、自ら漢詩を作っている。もちろん清少納言や紫式部の時代から、家庭教育として妻女に漢学を教える例は多々あった。しかし、亀井門下の場合は、もはや家庭教育の域を超えている。なぜなら、この私塾(注8)は、明確な教育目標や理念を設定した上で、自家版の教本を刊行し、身内以外の女子の入門をも認めていたからである。旧制東北大学に、女子の入学が初めて認められたのが大正2年(1913)。しかもこれは極めて例外的であり、他大学で女子の入学を受け入れ始めたのが、大正末～昭和初期以後という状況を考えれば、南冥は実に120～130年以上も時代に先駆けていたことになる。南冥の胸裏にあったのは、当時の人間がすべて死に絶えた、さらにその先の時代の教育観だった。

■2 才女から美人教師へ

さて文化2年(1805)、少栞が8歳の時に、父、昭陽が書き与えた『蛾子』という教本を見れば、この早熟な才女が、かなり難度の高い漢詩文を解し得たことが窺え、翌文化3年(1806)、9歳の時には、秋月藩主(注9)から縮緬帯を賜るほどに書道の腕を上げていた。

西新町(注10)(福岡市早良区)にあった父の家塾、百道社は漢学と医学を兼業していた。昭陽の『烽山日記』によれば、文化7年(1810)8月9日、13歳の少栞は、その課業の一つ、「会読」で首位を獲得した。会読とは既習内容を論題とした討論である。この時は『唐詩選』の五言絶句の会読で、彼女は並み居る俊秀たちを論破し、首位を守り通したのである。当時、会読は、どの家塾でも行われていたが、亀井門下のそれは、昭陽が「師旅(注9)(戦争)」と形容するほど熾烈(注10)を極めた。神童(注10)の誉れ高き広瀬淡窓(注10)でさえ、入門当初はほとんど歯が立たなかつたくらいである。南冥制定の学規によれば、会読で首位を3回守り通せば、舎長となる資格が与えられる。これは塾内に設けられた塾舎の長で、舎内生の学習の指導や監督を一任され、軍隊の伍長並みの権限を認められた。文化9年(1812)、少栞が15歳の時、「窈窕(注11)邱」という塾舎が新設され、彼女はこれを昭陽から賜った。少栞の本名、「友之」の由来が書かれた「名の説(原漢文)」には、「窈窕たる淑女(しとやかで美しい淑女)」云々、とあるので、舎号はこれと無縁ではあるまい。こうして少栞が「窈窕邱」も雅号とするようになった頃から、彼女は家塾の教職に就いたと思われる。

文化13年(1816)、19歳の少栞は、医局長を務めた三苦雷首(注11)(28歳)に嫁ぎ、夫の実家、

井原村（糸島市井原）に移った。しかし、西新町の実家は教職者が不足したと見え、文政元年（1818）9月に始まる昭陽の『空石日記』によれば、同年9月の時点で、彼女はすでに同社の教職に復帰している。時に少槩21歳。おそらくこれ以前も、彼女は、夫の家塾「好音亭」と父の百道社を兼任し、多忙な日々を送っていたと思われる。その後、文政2年（1819）、雷首は31歳で亀井家の婿養子となり、三苦から亀井に改姓した。これは彼が豪農から士分となり、大小二刀を佩びる身となったことを意味する。昭陽は十人扶持の平士とはいえ、歴とした福岡藩士である。文政4年（1821）、少槩が24歳の時には夫妻で百道社に呼び戻されたが、結局、文政7年（1824）、少槩が27歳の時、雷首の医療活動に適した今宿（福岡市西区）に移った。以後、彼女はこの今宿「好音亭」と西新の百道社で、教職、漢詩文、画業はもちろん、医師の妻、また一児の母として八面六臂の活躍をした。

彼女は頭脳明晰、才気煥発であつたばかりでなく、容姿も非常に優れていた。その美貌は昭陽が「芙蓉花」「美好」「玉容」と評するほどで、色白で透き通るような肌の美女だったという。まさに才色兼備、「窈窕たる淑女」の名に恥じない。名門漢学塾の深窓の令嬢でいられれば、おそらく美しき才媛として十分に評判になっただろう。しかし、少槩に課された教師という職業は、彼女が奥ゆかしい淑女であることを許さなかった。

■ 3 少槩の教え子たち

少槩が34歳の時に書いた『守舎日記』には、その体当たり教育の一端が窺える。「守舎」という表題から分かるように、夫（雷首）の留守を預かった時の漢文による日記である。雷首は天保2年4月15日（1831.5.26）、15日間の予定で平戸藩の生月島に出張した。この地で巨万の富を築いていた捕鯨業、畳屋又右衛門の要請である。だが、雷首の出張は当初の予定を大幅に超え、1ヶ月以上経っても帰還していない。福岡市総合図書館に現存する日記は5月22日（同7.1）で途切れ、以降の記録が失われている。

少槩が留守を預かった時、夫妻が主宰する今宿「好音亭」に在塾したのは、雷三、竹五郎、秀五郎という習字生（初学者）の少年、そして宗吾という医学生、そして少槩の妹、宗（18歳）、そして下男の愿次である。日によって多少の異同はあるが、概ね、雷三を除いた4名の塾生、および愿次の計5名が宿直を共にした（日記4月15日）。

秀五郎は、文政4年7月13日（1821.8.10）生まれの、五島屋秀五郎であろう（昭陽『空石日記』）。とすれば、この時11歳である。彼は、少槩の妹、敬之（通称、敬、31歳）の長男で、少槩にとっては甥になる。実家は姪浜（福岡市西区）の廻船業で、端午の節句には数多くの豪華な武者人形を飾り、庭の池に鯉を飼い、他人のお下がりには着たことがない、という裕福な家庭の子だった（昭陽『傷逝録 上』）。『守舎日記』4月17日の条で、雷三とともに「卒業」の謝礼に言及していないことから、おそらく外来生であろう。同日夜に催された「釣饅頭」に参加していることから分かるように、「守舎（留守番）」の塾生4名のうちの一人である。彼の場合、姪浜から距離も近い西新町（早良区）の百道社を選びそうなものだが、彼の母、敬

は、教師として姉の^{しょうきん}少葉を信頼し、愛息の教育を託したらしい。

もう一人の習字生、雷三もまた「卒業」の謝礼を免除された外来生である。『孟子』を卒業しているので、年齢は秀五郎と同世代だろうか。彼は4月16、28日の欠席の記事からも明らかのように通学生だが、状況に応じて宿泊もしている。

竹五郎は今宿「好音亭」に近在の守舎生で、母は^{おくに}阿国。後述のように彼女も頻繁に塾に出入りしている。彼は4月17日に『^{もうぎゅう}蒙求』^(注18)を卒業した記事があるので、秀五郎よりも歳下、おそらく9歳～10歳程度か。母の^{おくに}阿国は^{しょうきん}少葉（34歳）や^{たか}敬（31歳）と同世代であろう。

医学生の子宗吾は文政12年（1829）1月15日、百道社の「医学」に入って2年余り。守舎生4人のうちの一人で、この時は雷首のもとで医学と漢学を学び、すでに製剤・調剤係として医療の一端も担っている。彼の家も今宿「好音亭」の近所にあつたらしい。『傷寒論』のような漢籍の医書を読みこなす程度の「基礎」教育は、すでに終えているだろう。少葉が文化13年（1816）に書いた『^{せいひ}西鄙に遊ぶの記^{あそ}』^(注18)（原漢文）には、雷首につき従う「宗吾」なる小児が登場する。同一人物ならば、二十前後の青年のはずである。そうでなくても、少なくとも高校生相当だろう。当時なら、元服した成人だが、実は、彼が一番の「問題児」だった。

■ 4 生意気な悪ガキは力づくで

少葉の日記によれば、「(医学生の)宗吾は自分の学才を自負し、教師や父母を^{ないがし}蔑ろにし、人をバカにすることを好み（もしくは「ものすごく人をバカにし）、みんなから嫌われている」とある（『守舎日記』4月25日、原漢文^(注19)）。その「悪ガキ」に対し、少葉はどう「当たった」か。

以下は『守舎日記』の一節である。

4月18日（1831.5.29）（竹五郎の母）^{おくに}阿国が来たので、相撲をとることにした。宗吾に勝てる者がいない。^(注20)私に救援を願ったので、立ち合いでは（本気で）宗吾にぶつかっていった。宗吾は（その勢いに）対抗できなかった。（嫌われ者の宗吾が負けたので）みなは拍手喝采し、たいへん喜んだ。しかし、わたしの頭は痛く、（心臓の）動悸が激しくて、しばらくの間はもの言うことができなかった。（原漢文→注20）

相撲は亀井門下で人気のある娯楽の一つだったらしい。少葉の日記によれば、男女を問わず愛好されたことが窺える。阿国については、4月18日、28日にも「^{すもう}角力」の記事があるので、相当な相撲好きだったことは疑い無い。ただし、彼女も相撲を取ったのか、塾生同士の相撲を観戦するだけ、あるいは行司くらいは務めたのか、いずれか判明しない。

相撲は神事という性格もあり、また熱狂した観衆による騒乱の危険もあって、当時は女性の^(注21)観戦が制限、もしくは禁止されていた、と言われる。しかし、福岡では、文政年間、すでに少葉たちのような女性にとっても、きわめて人気のある娯楽となっていた。昭陽の『空石日記』文政2年（1819）9月1日の条には以下のようにある。

この日（9月1日）は恒例の（すぐ近くの紅葉八幡の）秋祭りの相撲興行で休講である。友也（少槲）が（昼寝をしていた私=昭陽）を呼び起こして、「相撲の喝采のどよめきで、わが家が震えています。さあ！（観に行きましょう）」と言った。（略）少槲（22歳）と（次女の）敬（19歳）は、（従姉妹の）阿蔭、（女中の）阿竹・阿策と観戦に出かけた。（私の）妻は友也（少槲）と帰って来た。そのことを問いただすと、（妻は）「（外出の）帰り道で八幡様に参拝し、（相撲を観ている少槲に）出会って、一緒に観戦してました。そのため遅れたのですよ」と言った。（原漢文）

この時、少槲は百道社の教師である。にも関わらず、「窈窕」の別号とは裏腹に、彼女は、若い頃から大の相撲好きだった。しかも『守舎日記』にあるように、観戦だけではなく、自ら取るのも好み、かつ、かなり強かった。「頭が痛む（頭痛）」、「しばらくはものも言えないくらい、心臓が激しく鼓動する（心悸、少時不能言）」という記述から、取り口はかなり本格的である。立ち合いで頭から激しく突進し、宗吾の体勢を崩して、一方的な優勢を保ったまま、一気に全力を出しきって圧勝したようである。彼女の並外れた集中力と男勝りな性格が、相撲でも発揮されたのだろう。また、力士の取り口を見て、相手や状況に応じて、どう闘えば勝てるかを研究していたかも知れない。気になるのは、相撲の時の少槲の服装だが、彼女がいくら男勝りの姐御でも、力士のような締込み姿は想像したくない。すでに初夏となっているので、着物は夏物の単衣である（日記4月21日）。そこで以下は本稿発表者の推測である。本格的な取り組みをしているので、手技・足技に支障があってはならないし、万が一負けて倒されて、裸体が露出するのも困る。となると、袖や裾は帯に挟み込み、あるいは襷掛けをしたかも知れない。倒れて下半身が露わになっては困るので、おそらくは旅装束のように、股引きを着けたのではなかろうか？ 通常の「湯巻き」のような下着では、あまりに露出度が高すぎる。髪型も不明だが、当然、相撲の激しい動きに耐えられるようにしただろう。

■5 イジメ事件

少槲は、驕慢な宗吾に相撲で圧勝することで、学識はもちろん、体力でも彼女が上位であることを、改めて思い知らせたはずである。しかし、この程度で宗吾の性根が直るはずはない。少槲の目が届かなければ、彼は年少者に対する粗暴な振る舞いを一向にやめなかった。以下もまた彼女の日記である。

4月25日（1831.6.5）午後15時過ぎ、（習字生の）竹五郎（推定10歳未満）は麦の収穫のため、父のあとについて行って、（習字生の）秀五郎（11歳）と麦畑に行った。ただ（医学生）の宗吾と（習字生の）雷三だけが好音亭にいた。（私の）妹の宗（18歳）も（在塾して）機織りをしていた。私は（福岡市東区の香椎神宮に参詣した下男）の愿次に代わり（厨房で）炊飯をすることにした。水を汲みたかったので雷三を呼び寄せると、（手で）顔を覆ってやって

来て、泣いている。私にはその理由がわからなかったので、問いただしたが、(雷三は)話することができない。そこで雷三を(厨房に)置いたまま、(塾舎に)行くと、宗吾が腹の前あたりに竹(の棒)を持って座っている。

妹(の宗)が言う、「雷三が漢籍の学習をしていると、宗吾がそばに来て冷やかし、竹(の棒)で雷三の頭をたたき、長い間しつこく手でつかみかかっていたが、雷三は無言のままだった。(私(宗)は宗吾を)制止したが、(宗吾は)やめなかった。だから、(私(宗)は)『雷三、どうして抵抗しないの、抵抗すればいいじゃない。(宗吾の)冷やかしの言葉に耳を貸してはだめよ』」というと、(雷三は)宗吾に一、二発、叩き返した。すると(宗吾が)逆上して、拳^{こぶし}を振り上げて撲り(倒し)、足を上げて踏みつけたので、(雷三はそのまま)頭を低くした姿勢で学習を続けた。宗吾は寝そべって、雷三の顔を見て、からかって笑った云々」(原漢^(注24)文)。

全く落ち度のない小学生に対し、高校生が一方的に暴行を加え、学習を妨害しているようなものである。しかも宗^(むね)の制止にも従わない。おそらく宗吾の性格からすれば、こうした粗暴な行為は、この時が初めてではないだろう。しかも、宗吾が悪びれている風は全く感じられない。彼は利発で学力は相応に高かったが、明らかに人間失格である。この事件に対して、少掾はどう対応したか。以下も日記である。

私(少掾)は、宗吾の粗野で乱暴な態度や行動が気に入らなかったので、(そのことを)彼の母に告げた。そして雷三には菓子を与えて慰め、秀五郎を呼び寄せて、一緒に外に出して遊ばせた。そして、妹(の宗)を叱った。(宗吾の暴行を私に)告げに来なかったからである。(子どもたちの前で叱らない、この配慮!)

隣の家の女中が(宗吾君、お父様がお呼びです、と)彼を呼び出した。しばらくすると宗吾が戻って来て、涙を流して言う、

「私の父がものすごく怒って言いました、『このわしに今年の祈願を叶えられなくするとは大不孝者だ、雷首先生が(平戸から)戻られるのを待って、塾から追い出してもらい、商家に^{でっ}丁稚奉公させることにする。すぐに文具を取って来い』と」。

私は(宗吾に)言った、

「お父さまのお怒りはもっともなことですね。でも、文具を持ち去るなんて、とんでもない、^(注25)破門(=永久追放)です。この問題は夫(雷首)が帰ってきてからにした方がよいでしょう。(夫が)約束した帰還の日(当初の予定は5日後の5月1日)はもうすぐです。しばらく待ってなさい(もしくは「待ちましよう」)」

宗吾が出て行くと、(入れ替わりに)彼の父が来て、

「わしが息子に(丁稚奉公に出すと)語ったのは脅しです。息子はその脅し話を聞いたのです。少掾女史、どうか本気にしないで下さい」と言う。

私は、

「お父様は他の親たちとは違って、宗吾君に（医者になってほしいと）期待しておられます。私は、もちろんお父さまのお気持ちはわかっています。心配しないで下さい」と言った。（宗吾の）父は感謝して去って行った。

しばらくして、宗吾が（戻って）来ると、いつものように笑いながら話をしている。私は、（宗吾の）父が息子の罪を厳しく叱らないで、軽く注意しただけではないか、と怪しんだ。（原漢文^(注26)）

泣いていた宗吾に笑顔が戻ったのは、なぜか。おそらく、父親が本気で丁稚奉公に出そうとしているわけではなく、かつ少槩も彼の医学の道を断つつもりはなさそうだ、と父から聞かされたからであろう。日記によれば、その後の事件の経緯は次の通りである。

そこで、宗吾には雷三に対して（きちんと）謝罪させた。宗吾の父がそうせよと言った、と偽って私が謝らせたのである。そして（被害者の雷三には）こう言い聞かせた。

「夫（雷首）が帰ったら、きっとこの一件が耳に入るでしょう。どうか宗吾の暴行は、（あなたの口から）わたしの夫に言わないでください。（あなたがどんなにひどいことをされたかが伝わったら）私の父も怒り狂うでしょう（そして、本当に破門になるかも知れません）」

雷三は「はい、わかりました」と言って去った。（原漢文^(注27)）

宗吾の暴行に対する少槩の一連の措置と、その後の経過（推測）を整理すると、次のようになる。

- ①事件を宗吾の母にまず報告した（当然、母から父に話は伝わった）。
- ②その結果、宗吾は父から厳しい叱責を受け、「破門させて丁稚奉公に出す」とまで言われた。
- ③ショックを受けた宗吾は、泣きながら戻ってきた。少槩は、破門については雷首が帰るまで保留にする、と本人に伝えて外に出した。
- ④入れ替わりやって来た宗吾の父は「丁稚奉公は単なる脅しだ」と言った。少槩は父に対し「宗吾を医者にしたい、という希望は理解しているので、安心するように」と伝えた。すると、父は感謝して出て行った。
- ⑤その父から、破門にならずに済みそうだ、という話を聞かされたのだろう、宗吾には笑顔が戻っていた。
- ⑥その宗吾には、あなたの父の命令だと偽って雷三に謝罪させた。
- ⑦そして、雷三には宗吾の暴行を雷首に知らせないように、口止めをした（子供の報告を真に受けて、そのまま昭陽に伝われば、宗吾が破門になるかも知れないからである）。
- ⑧そして以下は推測になるが、どんなに緘口令^{かんこうれい}を徹底したところで、この一件は結局だれか

の口から雷首に伝わるであろう。従って、おそらく夫の帰還と同時に、少槩が上手く伝えただろう、と思う。(宗吾が雷三に粗暴な行いをしましたが、すでに雷三には謝罪しています、宗吾の父親からもきつい叱責を受けています、あなたのお怒りも当然ですが、どうか何とぞ穩便に…云々という具合に)

結局、少槩は夫の留守中に起こったこの事件を、夫の帰還まで、彼女の胸一つに預かったことになる。この対応を今日の教師はどう思うだろうか。「イジメ」が教育上の大きな問題になっている現状からすれば、少槩の対応は、宗吾に対して甘すぎる、という声もあろう。そもそも南冥が制定した学規では、^(註28)年少者や弱者に対する粗暴行為を厳禁している。百道社では、塾内で重大な問題を起こした門生は、塾外謹慎になるのが通例だった。一時的な所^{ところ}払いである。ところが宗吾はその処分さえ保留され、いつも通り笑みまで浮かべている。しかし、本稿の発表者は、少槩の措置が手ぬるいとは決して思わない。

■6 道徳教育と宗吾のその後

少槩は「力」づくや厳罰主義の指導の限界を心得ていた。『論語』「為政」には、孔子の言葉として、

「之を道^{これ}びく^{みち}に政を以てし、之を^{ととの}齊ふるに刑を以てすれば、民免れて恥無し」(原漢文)

とある。これはお上の掟^{かみ}だ、^{おきて}と言い聞かせ、違反者には刑罰を加えて従わせようとするれば、人々はいま抜^かけ道を見つけて、それを恥^かずかしいことだとも思わない、というような意味である。

昭陽は『論語語由述志』の中で、この「民免れて恥無し」を次のように説明している。「もしも(要領よく)処罰を逃れようとしているだけならば、(それは)心の底から悔^かいする、という状態ではない、とりあえず違反や反則はしない、ということだ(原漢文、苟免刑^か懲而已、非中心耻。不為非也)」

まさに破門や丁稚奉公を免れそう^かで笑みを浮かべる宗吾そのものである。

では、どうすればいいのか。孔子の答えは徳治主義である。

「之を道^{これ}びく^{みち}に徳を以てし、之を^{ととの}齊ふるに礼を以てすれば、恥^は有りて且格^{かついた}る」(原漢文、道之以徳、齊之以礼、有恥且格。『論語』為政)。

つまり、教える側の徳性が未熟な精神に感化を与えて、礼節にかなった態度が身につくようになる。そうすれば、恥を知るようになるばかりか、さらに人格教育が徹底するのだ、と孔子

は言う。昭陽は前述の『述志』の中で「恥有りて且格る」を次のように説明している。

「心の底から悔悛するようになって、人はみな理想的な形で善なる境地に達するのだ（原漢文、中心耻為非、而烝々威格於善也）」と。

文政1年（1818）に昭陽が後藤生機（頼山陽の弟子）に与えた書簡には「孔門に画一して学と為す」（原漢文）とあり、文政7年の『家学小言』第二章も同様である。亀井門下では南冥の頃から、孔子一門の教えを、唯一の正しい道として奉じていた。当然、少榊もこの塾是に忠実である。彼女は、『守舎日記』の中で、「『書』は以て其の性弊を改めしめんと欲するなり（原漢文）」と述べている（4月25日）。

『書経』によって宗吾の性格的な欠点を改めさせたい——この時、宗吾が学んでいたのは『書』、すなわち『書経』^(注29) だったらしい。『書経』にある聖賢の言葉を学ばせ、その感化に期待して、少榊は、宗吾の性格的な欠点を内発的に矯正しようとしていたのである。この時、具体的にどの箇所を学んでいたのかは分からない。しかし、『書経』には例えば、「百姓過ち有らば、予一人に在り（原漢文：泰誓中）」という周の文王の誓いの言葉がある。この「泰誓」は問題が多い篇なのだが、おおむね次のように解釈されている。「人々に過失があれば、それは私一人だけに責任があるのだ」と。敬虔なキリスト者にして札幌農学校の初代教頭、W.S.クラークの人格教育は『聖書』に基づいていたが、この文王の誓いは、全人類の罪を一身に受けて、十字架上で刑死したイエス・キリストに通ずるものがある。このような聖賢の至言に数多く触れさせることで、少榊は、宗吾の人格的覚醒を期待していたのだ。結局、少榊がいくら男まさりで、青年を圧倒するだけの身体能力があったとしても、最終的には彼女の人間性と『書経』その他の経書に込められた先哲の教えに、未熟な魂の徳化を託したのである。

さて、天保2年（1831）初夏に起きたイジメ事件の後、宗吾は、いったいどうなったのか。少榊の口止めは効を奏したのか。残念ながら、少榊の『守舎日記』は雷首の帰還後のことは書かれていない。また現存する昭陽の『空石日記（自筆）』は、この事件が起こった天保2年をはさみ、文政12年（1829）暮れから天保4年（1833）の年始まで、およそ3年強の記録が失われている。従って、この事件の詳しい経緯は不明である。

ただ、宗吾は、どうやら破門は免れたようである。天保4年（1833）12月28日には昭陽の孫、恒之允^{つねのすけ}の4歳の誕生日に、雷首の使者として宗吾が祝賀金を贈った記事が、同5年5月7日と8日の日記には、昭陽が、彼から西瓜^{すいか}を贈られた記事があるからである。宗吾は相当な問題児だったにも関わらず、昭陽・雷首との師弟関係は断絶していなかった。つまり破門されなかったことになる。

少榊は、宗吾が何とか心を入れ替えてくれるよう、さまざま腐心し、また雷首や昭陽、父兄や塾生との人間関係を取り持って、四方八方に気配りをしていた。だが、当の宗吾は、彼女の

苦勞と教育的愛情に気づくことはあったのだろうか？（松原唐嶋）

（文末注）

注1 『儒侠 亀井南冥』大正2（1913）高野江基太郎著。

注2 金印と南冥の俠気…金印は天明4年（1784）に発見された直後から、溶かして武具の飾りにしようとする動きがあり、南冥は百両で買い取ってでも守り抜こうとした。幸い南冥が大金を費やすには及ばず、金印は藩庁の所管となった。（2020『駒沢史学』55号、田中弘之「『漢委奴国王』金印の出土に関する一考察 亀井南冥の動静を中心に」）

注3 白石照山…中津藩儒。『福翁自伝』には「亀井が大信心で…」とある。

注4 『北条霞亭』…同名の漢学者を主人公とする森鷗外の史伝小説。鷗外の最後の作である。亀井南冥は「其の56」、昭陽は「同135」に登場する。

注5 亀井南冥の慧眼…天明8（1788）「女誠の後に題す（原漢文）」及び江上荅州「大家の女誠を刻するの叙（原漢文）」より。江上荅州は南冥の高弟。

注6 班昭…『漢書』の著者、班固の妹。著述半ばで亡くなった兄の遺業を引き継ぎ、『漢書』を完成させた。

注7 少榊の母（伊智）と叔母（紋）の漢学の素養については、昭陽の『傷逝録（下）』や同「山士繁に復する書（第21信）」にある。山士繁は昭陽の甥、山口士繁（福岡藩書記）。紋の長男である。

注8 女子教育の目標、理念、教本、身内以外の女子の入門…目標・理念は前述『女誠』序・跋に述べられているほか、亀井門下では『女誠』の版木を自塾に備えていた。外部の女性の入門については亀井南冥の「富永夢世居士墓誌銘」に記されている。

注9 戦争のような討論…寛政1（1789）亀井昭陽「成国治要」。

注10 神童、広瀬淡窓の入門当初…淡窓『儒林評』（紀平洲の項）および『懐旧楼筆記』巻七（寛政九年）。

注11 南冥制定の学規…「蜚英館学規」第三条および「甘棠館学規」第四条。

注12 少榊の美貌…「美好」「芙蓉花」は昭陽の『己卯稿』に、「玉容」は『傷逝録 下』にある。「色白」云々は『傷逝録 中』に「玲瓏不墨」とある。

注13 豊屋又右衛門…西海一の鯨捕りと言われた益富又左衛門の分家。南冥はこの益富一族の主治医を務め、雷首がそれを引き継いだ。益富一族は知人の青少年を亀井門下に学ばせたほか、有力な支援者でもあった（*参照：1999鳥巢京一『西海捕鯨の史的研究』九州大学出版会）。

注14 習字生…「習字」は「書物」を通して「漢字」を習う、の意で、今日の「お習字」よりも意味が広い。言うなれば、漢学の「基礎」課程である。もっとも、当時の「基礎」は、今日の大学（学部）で学ぶ漢文を軽く超えている。今日、大学で漢文を学んでも、漢詩は作れない。

注15 亀井宗…文政5年（1822）11月、9歳で西新町「好音亭」に入学し、以後、少榊に師事した。好音亭は文政4年から7年まで、百道社の敷地の中にあった。

注16 卒業…ある書物を習って、一段落すること。あるいはその時に、師匠に謝礼として贈るご馳走。近在の通学生で、親の援助が容易に得られる生徒は、慣習的に行なっていたらしい。師匠の側ではこれを他の塾生にもふるまった。「読書 畢れば 輒ち先生饌す、是を卒業と謂ふ」（原漢文『守舎日記』4月17日）

注17 釣饅頭…饅頭を使ったパン食い競争のような室内遊戯。両手で両足を持って素早く膝行するか、「懐中足」すなわち片足を懐中に入れて片足立ちになり、吊り下げた饅頭に食らいつく（日記4月17日）。

注18 『蒙求』…平安時代より定番の初学者用の教本。

注19（原漢文） 宗吾自負其才、無師父母好凌折人、為衆所憎。

（書き下し） 宗吾 其の才を自負し、師と父母とを無みし、人を凌折するを好めば、衆の憎む所と為る。

注20 私…原漢文では本名の「友」を一人称として用いている。

(原漢文)阿国来、則為角力技。無能勝宗吾。乞救於友、則当之。宗吾不能抗。皆撫手大歎。而友頭痛、心悸、少時不能言。

(書き下し) 阿国 来れば、則ち角力の技を為す。能く宗吾に勝つ無し。救ひを友に乞へば、則ち之に当る。宗吾 抗ふ能はず。皆 手を撫して大いに歎ぶ。而れども友の頭 痛く、心 悸し、少時 言ふ能はず。

注21 女性の相撲観戦の制限・禁止…2008吉崎祥司・稲野一彦「相撲における『女人禁制』の伝統について」(『北海道教育大学紀要』)。このように福岡では相撲が女性にも早くから解禁されている一方、櫛田神社(博多区)の伝統的な「追い山笠」は対照的に、現在も女性の参加を認めない。

注22 さあ!…原漢文は「薄言」(後掲の漢文参照)。『詩経』周南「采芣苢」にある語である。昭陽による『詩経』の注釈書、『毛詩考』にはこの語の訓について言及しないが、おそらく漢音直読で「薄言」もしくは「薄言」と訓んでいたのではないか。自註には「采芣苢という草を摘むために外に出かけよう、ということを行っている」とある(言其為采之而出遊也(其の之を采らんが為に出遊するを言ふなり:昭陽自身の訓点による))。『全釈漢文大系』(集英社)や『新釈漢文大系』(明治書院)とは違った解釈だが、今日的な「急急忙忙(さあさあ、もたもたしてられないよ!『漢語大詞典』)」という解釈に近いのは、昭陽の方である。亀井門下は、ここでも150年以上、時代を取りしている。

(原漢文)九月朔日…是日神祭角抵休講例也。…友也喚起曰、「角力喝采動屋、薄言」。…友也、敬也、与阿廕、阿竹、阿策行。内氏与友也婦、詰之。曰、「婦路拝神而邂逅、相覩。是以遲矣。」

(書き下し) 九月朔日…是の日の神祭角抵の休講は例なり。友也喚起して曰く「角力の喝采 屋を動かす、薄言」。友也、敬也は阿廕、阿竹、阿策と行く。内氏 友也と婦れば、之を詰す。曰く「婦路に神を拝して邂逅し、相覩る。是を以て遅れたり」と。(亀井昭陽『空石日記』)

注23 午後15時過ぎ…原文の「未牌後」は「未の後刻(午後14~15時)」とも「未刻の後(午後15時以降)」とも解せるが、夕食の炊飯を始めようとしているので、後者と解した。

注24 (原漢文) 未牌後、竹也為獲麥与秀也從竹父往田。唯宗吾雷三在好音。妹也亦織。余代愿次作炊爨。欲汲水、招雷三、覆面而来泣。余不知其所以。問之、不能言。則拌作適、宗吾胆腹持竹而坐。妹曰、「雷君習字、宗君到側啖哄之、以竹撫其頭、以手搏擊之良久。雷君不答、止不止。因謂雷君、『何不抗之。勿聽』。則擊之一二、則怒甚奮拳擊之、拳足踏之、則低頭習字。宗吾伏視其面、而談笑云々」。

(書き下し) 未牌の後、竹也 麦を獲る為に秀也と竹の父に従つて田に往く。唯だ宗吾と雷三とのみ好音に在り。妹也も亦た織る。余 愿次に代つて炊爨を作す。水を汲まんと欲し、雷三を招けば、面を覆つて来り泣く。余 其の所以を知らず。之を問ふも、言ふ能はず。則ち拌てて適を作せば、宗吾 胆腹に、竹を持して坐す。妹曰く、「雷君習字せしとき、宗君 側に到つて之を啖哄し、竹を以て其の頭を撫し、手を以て之を搏撃すること良に久し。雷君 答へず。止むるも止めず。因りて雷君に謂ふ、『何ぞ之に抗はざる。聴く勿かれ』と。則ち之を撃つこと一二たびなれば、則ち怒ること甚だしく拳を奮つて之を撃ち、足を挙げて之を踏めば、則ち頭を低れて習字す。宗吾 伏して其の面を視て、談笑す云々」と。

注25 破門…当時は入学に際し、親が文机と手文庫を用意した。破門処分を受けた生徒はこの一式を背負わされて塾を追放され、往来の人目にさらされた。本人には相当な恥辱である。

注26 (原漢文) 余既厭其無嬾、以告其母。而予菓慰雷三。召秀使共出遊。而責妹以其不来告。隣婢召宗吾。少時宗吾来、流涕曰、「我父怒甚、曰、『不使我達年願者大不孝。将待夫子婦擯出、以為商家奴僕。速取文具来』」。余曰、「大人之怒宜哉。然持文具去、乃破門也。是計宜在婦来之後、前期不遠、姑待之」。宗吾出。其父来曰、「我所語兒者、懼之也。而兒聞之、君請勿信」。余曰、「君托宗也異於他人。我固識子之意。勿勞心」。父謝々去。有姑宗也来、笑語如常。余怪以為父不詰其罪、而戒之耳乎。

(書き下し) 余 既に其の無嬾を厭ひ、以て其の母に告ぐ。而して菓を予へて雷三を慰め、秀を召し

て共に出遊せしむ。而して妹を責むるに其の来りて告げざるを以てす。隣婢 宗吾を召す。少時あり宗吾 来り、涕を流して曰く、「我が父の怒ること甚だし。曰く、『我をして年願を達せしめざる者は大不孝なり。將に夫子の帰るを待つて擯出し、以て商家の奴僕と為さんとす。速やかに文具を取つて来れ』」と。余 曰く、「大人の怒ること宜なるかな。然れども文具を持つて去るは、乃ち破門なり。是の計 宜しく帰来の後に在るべし。前期 遠からず。姑く之を待たん」と。宗吾 出づ。其の父 来りて曰く、「我が兎に語る所の者は、之を懼れしむるなり。而れば兎 之を聞くも、君よ請ふ信ずる勿かれ」と。余 曰く、「君の宗也に托すること 他人に異なり。我 固より子の意を識る。心を勞する勿かれ」と。父 謝々して去る。姑く有りて 宗也来る。笑語すること常の如し。余 怪しんで以為へらく 父 其の罪を諱せずして、之を戒むるのみかと。

注27 (原漢文) 則使宗吾謝雷三。余偽父囑謝。且曰、「夫子之帰当聞之、請勿告。大人以狂怒」。雷三唯々去。

(書き下し) 則ち宗吾をして雷三に謝せしむ。余 父の謝を囑するを偽る。且つ曰く、「夫子の帰るとき当に之を聞くべし。請ふ告ぐる勿かれ。大人 以て狂怒せん」と。雷三 唯々として去る。

注28 年長者による粗暴行為(イジメ)の禁止…「蜚英館学規」第22条および「甘棠館学規」第21条。

注29 『書経』…4月17日の日記に宗吾の『尚書(書経)』卒業の記事がある。